研究機関名：下関市立市民病院

研究課題名：開胸心臓手術患者における術前１年間の転倒歴が予後に及ぼす影響

研究期間：西暦 2024 年 12 月 1 日～2025 年 7 月 20 日

対象材料：

☐病理材料（対象臓器名：　　）

☐生検材料（対象臓器名　　）

☐血液材料

☐遊離細胞

■その他（診療録　　）

上記材料の採取期間：　2021 年 4 月　～　2024 年 9 月

意義：

近年、心血管疾患患者の高齢化に伴い、転倒が重要な課題となっている。転倒は、骨折や頭部外傷を引き起こし、日常生活動作（ADL）や生活の質（QOL）の低下、死亡リスクの増加につながるため、予防と管理が求められる。特に、心血管疾患患者では、内服薬の影響、フレイル、サルコペニア、認知機能低下などが転倒リスクを高める要因として指摘されている。

一方で、近年の手術技術および周術期管理の進歩により、心臓手術は高齢患者にも広く適応されるようになっている。しかし、高齢患者では術後の身体機能や ADL の回復が遅れることが多く、一部の患者では退院後の予後が不良となるケースも少なくない。その背景には、術前からのフレイルやサルコペニア、ADL 低下などの影響が考えられる。特に、術前の転倒歴は、これらの因子と関連し、退院後の予後を予測する上で重要な指標となる可能性がある。

実際に、心不全患者の 1 年間の転倒率は 39～43%と報告されており、心不全患者は非心不全患者と比較して転倒リスクが 14%高いことが示されている。さらに、心筋梗塞、心房細動、心不全などの心血管疾患で入院した成人の 60%以上が、年齢に関係なく転倒リスクが中等度から高度と評価されている。これらの知見からも、心血管疾患患者において転倒リスクの評価が重要であることが示唆される。

目的：

開胸心臓手術患者における術前１年間の転倒歴が予後に及ぼす影響を明らかにすること。

方法：

当院の患者データベースおよび電子カルテより後方視的に通常診療の範囲内で得られる患者基本情報や医学的情報、治療経過、リハビリテーション経過、退院時の身体機能評価、退院後の全死亡、心不全再入院、全死亡＋心不全再入院の複合、主要心脳血管イベント（MACCE）を診療録より収集する。

個人情報の取り扱い：

患者様の個人情報は、個人を特定できる情報とは切り離した上で使用する。また、研究成果を理学療法関連学会で発表するが、患者様個人を特定できる個人情報は含まない。

問い合わせ・苦情等の窓口：

〒７５０－８５２０
山口県下関市向洋町一丁目１３番１号
下関市立市民病院　リハビリテーション部　月城　一志
TEL　０８３－２３１－４１１１　　FAX　０８３－２２４－３８３８